

第14号
2021.5

カウンセラー
吉澤 克彦

こころ

心の中の激流と純粋さ

はあ？うっせえうっせえうっせいえわ

昨年度末に、ストーリーミング累計再生回数が1億回を突破だという。自己矛盾を抱えながらも強い言葉で外界をはねつけているかのような、乱暴なフレーズや歌詞全体の世界観に共感した中学・高校生や若者。小学生までも。

子どもから大人への移行期である思春期のただ中の中学・高校の時代は、身体的な成長と精神的な変化がアンバランスで、不安定になる時期。自我意識が芽生える一方で、ありがたい自分と、現実の自分とのギャップに思い悩むこともしばしば。

突然、周りのことがとても気になってきたり、人と違うことに強い劣等感にさいなまれたり、急に不安になったり、泣きたくなったり、「うっせいえわ」と、Adoさん（「踊」もリリースされましたね）のように怒りを抑えられなくなったりすることは一度と言わず皆さんにもあるはず。人それぞれ振り幅はあるが、だれもがたどる思春期の心の揺れ動きが、この「うっせいえわ」「踊」にはみごとに表現されているのだろう。

怒りの感情以外でも、いままで自然にできていたのに、親や先生、身近な友人に気軽に相談できない気分の日があったり、理由のはっきりしない落ち込みに包まれたりすることもあるのではないかな。一方、誰かにすがりたい、分かってもらいたい、何かで気を紛らわせたいと激しく希求する自分を自覚する日もあるでしょう。

ところで、急に話しが変わるように思うかも知れませんが、私はジブリの世界観がとても好きです。中学・高校生、先生方にもファンはたくさんいると思うので、ジブリの話しを少しだけ書きます。

右の写真は、『耳をすませば』（ジブリ）の1シーンが背景。

数年前、「近藤喜文展」（新潟県立万代島美術館）で撮影。ファンであれば『耳をすませば』と「近藤喜文」の関係は分かるでしょう。そう、代表作とその映画監督。

近藤喜文監督は、25年前、この映画への思いを「少年と少女の爽やかな出逢いの物語をやってみよう」と語っているのですが、この映画のもう一つの大きなテーマは「夢の実現のために一歩踏み出す」ということ。主人公雫も相手役の聖司も中3の秋、一つの決断をして自分を見つめながら、依存から自立へ、夢への挑戦を始めるまでの物語です。

みなさんにも実現したい夢、求めたい未来があるでしょう。

心の中の激流と叫びに身をゆだねるのも思春期、純粋に夢に踏み出すことのできるのも思春期。だれもが一人の中に両方の心をもっているのが、まさに思春期の複雑さ。

カウンセリングルームは、心の激流と純粋な思い両方に寄り添いたいと思います。

